

在米片山潜が発行した『平民』について

——総目次と発見された第13号

田村 貞雄

はしがき

- 1 片山潜の遠州三倉村遊説
- 2 片山潜の三倉村同志への書翰
- 3 『平民』の発行

あとがき

はしがき

1914年4月第1次大戦が勃発した。大戦勃発を契機に、戦争と革命をめぐる第二インターナショナルの分裂が始まる。

同年9月片山潜はアメリカに向かった。当初は8月下旬に開かれる第二インターナショナルのウィーン大会出席が目的であり、片山はシベリア鉄道経由で渡欧しようとしていた。しかし戦争勃発で大会は中止されたため、片山は渡欧計画を渡米計画に変更した。実際には、日本の運動に絶望して渡米することになった。サンフランシスコに居を定めた片山は、さまざまな職業に従事しながら、移民問題に直面し、また1915年における友愛会の鈴木文治の渡米に刺激されている。片山は「ソシアリスト・レビュー」に寄稿しはじめ、日本の堺利彦・山川均らの『新社会』にも通信を送るようになった。

1916年5月片山は月刊雑誌『平民』を発行した。タブロイド版でわずか8ページの雑誌であるが、在米日本人の運動情報のほか、日本の情報や片山の論評を掲載した。これには、野中誠之⁽¹⁾と岡繁樹⁽²⁾の助力があったという。

同年12月片山はニューヨークに移り、『平民』を細々と発行をつづけた。ニューヨークでは、オランダの社会主義者ラトカーズ（リュトヘルス）の助力があり、片山はしだいに左派の運動にかかわりを持つようになった。1917年3月のロシア二月（旧暦）革命勃発に引き続き、11月の十月革命

(1) 野中誠之については、吉田隆喜『無残な敗北－戦前の社会主義運動を探る』三章文庫、2001、がもっとも詳しい研究である。

(2) 岡繁樹「片山潜とアメリカ」『改造』32-8、1951.07、pp.77-83。

は、片山の運命を変えた。ニューヨークでのロシアの社会民主労働党（ボルシェビキ）との接触は大きな転機となった。

やがて片山は第三インタナショナルへの参加とアメリカ共産党結成を積極的に進めた。『平民』は1919年6月の21号まで発行されたようである。

残念ながら『平民』の各号は全部は見つかっていない。

本稿は、『平民』の概要とともに、片山が静岡県周智郡森町の2人の有志に『平民』を送ってきた事情を紹介し、総目次と森町で見つかった13号（1917年10月発行）の紹介である。

1 片山潜の遠州三倉村遊説

1908年（明治41）1月25日午前5時20分、東海道地方遊説中の片山潜と鈴木楯夫の2人は、袋井駅で下車した。駅には静岡県周智郡三倉村の中川栄太郎と松井八郎が迎えにきており、一行は駅前の馬車屋を叩き起して森町経由三倉村へ向かった。

この遊説については片山潜がくわしい「東海道遊説日記⁽³⁾」を旅先から自派の『社会新聞』に書き送っており、また自伝⁽⁴⁾のなかでもくわしく触れている。

当時片山らは、田添鉄二、西川光次郎らと社会主義同志会を結成し、『社会新聞』を発行していた。前年（1907年）2月の日本社会党第2回大会での幸徳秋水と田添鉄二の議会政策をめぐる論争以来、幸徳ら無政府主義派の直接行動論と田添らの議会政策論との分岐が深まり、その年の夏には、幸徳、堺利彦、山川均らの金曜会と社会主義同志会の組織的対立にまで至っている。

この時期には片山の属する社会主義同志会は、地方での同志獲得を求めて盛んに遊説を行った。西川光二郎は北海道を遊説し、片山・鈴木は1908年1月4日に東京を出発、中央線にて甲府に至り、山梨県各地を遊説して甲府支部の結成に成功し、その後富士川を船で下って静岡県に入り、静岡市と江尻町（現静岡市清水区）で演説会を開き、静岡支部の結成に成功した。さらに彼らは愛知県、岐阜県に赴き、連日のように演説会を各地で開いて同志獲得につとめたのである。

彼らが静岡市に滞在していた1月12日朝のことである。社会主義同志会静岡県支部となった市内四つ足町（現中町）の歯科医長谷川吉蔵宅に居た片山らを「三河三倉村の同志」で「同村農民の団体至誠会の副会頭」が訪ねてきた。「三河」というのは遠江の誤りで、三倉村は周智郡に属し、森町の北方に位置する小村である。至誠会はどういう団体か不明であるが、会頭（長）は前村長高野五左衛門であり、高野が三倉周辺ではもっとも早く1880（明治13）年に結成された黒田報徳社の創立者でもあることから、報徳主義の団体と思われる。

その副会頭が三倉村一の瀬の中川栄太郎である。中川はすでに『平民新聞』を購読しており、熱心な社会主義者であった。

中川の求めに応じて片山と鈴木は東海道遊説の最後に三倉村を訪れることを約束した。片山らは

(3) 『社会新聞』32号（1908年1月12日付）より35号（同年2月2日付）まで6回分載（34号に3回分掲載）。本稿でとりあげる三倉村訪問記はその（六）（35号所載）である。

(4) 片山潜『わが回想』下、徳間書店、1967、p.213。

1月24日に愛知県渥美郡田原町で演説会を終えたのち、夜の11時に同町を馬車で出発した。前掲の「東海道遊説日記」によると、「豊橋に達したるは午前一時、汽車（ママ）待ち合わせの爲め三時間余を費やし袋井駅に達したるは五時二十分⁽⁵⁾」とある。

彼らは駅頭に出迎えていた中川らの案内で馬車に乗り、森町を経て三倉村に至った。そして榮泉寺において演説会を開いたが、この山村には珍しく農民200名が集まって熱心に片山・鈴木の社会主義演説を聞いた。のちに村会議員をつとめ、青年団、報徳社でも活躍した中野連太郎氏は、鈴木楯夫の激越な演説を記憶しておられ、感動して大枚50銭を寄付したと筆者に語られた⁽⁶⁾。東海道遊説全体の寄付金の中でも三倉村の人びとの寄付は大きな比重を占めており⁽⁷⁾、片山も鈴木もこもこも三倉村での厚遇をのちのちまで語っている⁽⁸⁾。社会主義運動の分裂、弾圧の強化という当時の困難な状況の中で、三倉村の人びとの熱心な社会主義運動への関心は、片山らの精神的な支えともなった。

1977年中川栄太郎の孫にあたる中川勝巳氏宅より、大量の社会主義関係の新聞や書籍、片山をはじめとする中央の社会主義者たちからの書簡が発見され、大きな話題を呼んだ。資料の発見者は、当時静岡県労働組合評議会の嘱託だった故杉山金夫氏（1925年10月4日—1988年2月15日）である。杉山金夫氏は静岡県職員組合の活動家で、1954年1月全日本自治団体労働組合（自治労）が結成された。その初代中央執行委員に東海地方代表として杉山金夫氏が選ばれた。初代の青年婦人部長でもある。

この時杉山氏は静岡大学法経短期大学部（夜間部）の学生でもあり、初代学生自治会委員長をつ

(5) 『汽車汽船旅行案内』（庚寅新誌社 交通博物館蔵 1907年11月）によれば、豊橋発午前3時09分の新橋行急行（神戸始発）があり、これに乗車すれば午前3時54分に浜松に到着する。ここで、一旦下車し午前4時45分発の掛川行（浜松始発）に乗れば、午前5時20分に袋井に到着（ただしこの時刻は発車時刻）する。片山の記述では豊橋で3時間余も待ったようだったが、これは2時間余であろう。

(6) 1982年4月17日森町黒田（旧三倉村）の中野連太郎氏宅で聴取。中野氏はその1ヶ月あまり後に98歳で大往生を遂げられた。

(7) 『社会新聞』37号（1908年3月1日付）に掲載された「東海道遊説寄付金」報告によると総額25円のうち三倉村の人びとは12円50銭を寄付している。ちなみに山梨県全体で2円、静岡支部が2円50銭、亀崎町友愛義団（宮下太吉ら）が2円、名古屋有志が6円という内訳であった。片山は「東海道遊説雑感」（『社会新聞』37号、1908年3月1日付）の中で「今回地方の遊説をなして意外なる所に我同主義者の在る事を知り頗る意を強ふせり」と「隠れたる同志」の存在を強調している。

(8) 片山はニューヨークから鈴木楯夫宛に出した1920（大正9）年8月24日付の書翰で「ことに僕は日本の労働者および社会運動に対しては、僕のもっとも盛なる元気のある時にやったので、これを片時も忘る事は出来ない。これを思う毎にわれわれ困難の間にやった運動はいつも念頭に浮ぶのです。彼の甲府や静岡、三倉村などに行き好遇せられたことや、四日市其他、大阪地方、金沢辺で失敗したことを忘れることは出来ません。」と述べている（岡田宗司編『革命的社会主義への道——片山潜遺稿』刀江書院、1970、p.282）。鈴木もまた同年9月2日付の中川栄太郎宛の手紙のなかで、「貴兄を思ふ毎に、貴家の前に流れて居る川と、後ろの山を考へます。川の水はキレイでした。演説会場に当てられた寺は影色の好い所だとの記憶が起って来ます。思想の友は十年も何年も変りません。」と述べている。杉山金夫『静岡県社会運動史研究』（杉山金夫遺稿集刊行会 2004年）所収。同書については、『初期社会主義』17号（2004年、pp.250-253）所載拙稿参照。

とめたこともあった。1955年に同自治会が山川均と羽仁五郎を招いて講演会を行なった時、すでに卒業して静岡県職員組合、静岡県評・静岡地区労・左派社会党静岡支部の有力な活動家であった杉山氏は、これに全面的に協力され、市内沓谷霊園にある大杉栄の墓に山川均を案内し、以後大杉墓前祭を終生主宰された。

1957年杉山氏はモスクワで開催された世界青年学生平和友好祭に参加し、日本代表団の旗手をつとめられた。1961年総評が東ドイツに派遣した留学生の一人として、杉山氏は自治労から選ばれて参加され、ライプチヒ大学で2年間ドイツ語の教育を受け、1963年にフンボルト大学哲学部歴史学科に入学し、1968年まで在学された。卒業研究はドイツ革命運動史であったという。

帰国後は、自治労の東海地連事務局長を3期、静岡県職員組合の専従役員を5期勤められた。くわしい事情は分らないが、その後、運動の中心から外れ、静岡県評の嘱託として、停年まで過ごされた。氏はすでにドイツ革命運動史をあちこちの新聞雑誌に寄稿していたが、やがて静岡県の社会運動史を手がけるようになった。

1977年に、杉山氏は『社会新聞』を検討し、袋井駅に下車して三河三倉村に行ったという記述に疑問を持ち、これは周智郡の三倉村（現在森町）ではないかと思い、演説会場の栄泉寺に電話された。栄泉寺には片山潜らの講演の記録はなく、郷土史家の小林小三郎氏を紹介された。小林氏は若い頃、村内一之瀬の中川家に「平民館」という看板がかかっていたことを思い出され、杉山氏を案内された。天井裏からおろされた鼠の糞だらけの茶箱を開けると、多数の書翰と社会主義関係の書籍と雑誌が出てきたのである。そのなかに当初の祖父に当る中川栄太郎宛の片山潜の書翰があった。中川家には、片山潜が英文で揮毫した2つの掲額があった。

「The Workers of Whole World Unite!

By Marx

S. S. Katayama」

「Work according your Ability

Divide in Justice for All.

By S.Katayama」

小野家にも書籍や新聞雑誌があるという話を聞いて、同家を訪れると、同家の先代の藤一郎（旧姓森下）宛の幸徳秋水の書翰と片山潜から送られたという英和辞書があった。

杉山氏は当時中日新聞の静岡版（県東部は東京新聞）の夕刊に静岡県の自由民権運動以来の社会運動史を「隠れた民衆史」として連載しておられ、早速三倉村の新史料を取り上げられた。

杉山氏はNHK静岡放送局にも相談された。当時同局のディレクターだった渡辺房男氏（のち作家）が、わたしが在職していた静岡大学教養部の知り合いの教員に、日本近代史の専門の教員に協力を求めて幸徳秋水の2点の書翰の写真を託された。これが1910（明治43）年5月1日付と5月1日付の湯河原からの書翰で、幸徳はこの月末に大逆事件で逮捕されるのである。

この写真を渡されて驚いたわたしは、早速杉山氏に連絡をとり、学生とともに史料整理にあたった。そして杉山氏と発起した静岡県近代史研究会の『静岡県近代史研究』創刊号に杉山論文と主要

史料を掲載したのである⁽⁹⁾。

所蔵書籍のなかに片山潜の『都市社会主義』があった。どうして都会風の社会主義が農民の共鳴を得たのか疑問があった。調査のたびに定宿にしていた旅宿兼食堂の島屋のおかみさんから、「ここは秋葉街道だからですよ」と言われた。秋葉街道というのは、秋葉三尺坊への参詣路で、近世には東海道の掛川宿から入り、秋葉山に登り、三尺坊を参詣したあと、三河に入り、鳳来寺に参詣し、豊川稲荷を経て御油宿で東海道に合する脇街道である。途中森町には75軒の旅宿があり、朝、宿を出て三倉はちょうど昼の弁当を使う休泊所だった⁽¹⁰⁾。芸者のいる料理屋もあったという。また「すべての道は秋葉に通ず」といわれるように、信濃、三河、遠江の各地からさまざまな秋葉街道があった。

戦前の島屋はバス停を経営していて、袋井経由で東京や大阪までの連帯切符を販売していた。その料金表が食堂に掲げられていた。わたしは前掲史料解説において、三倉村が秋葉街道に面した山村であると述べたのであるが、この時には秋葉街道についてはほとんど知識を持っていなかった。しかし秋葉街道を知れば知るほど、東京方面の情報が早く入ってくる重要ルートであることを認識したのである。

わたしは、当時の片山潜が同志の千葉県出身の座間止水とともに「村落社会主義」を唱え、普通選挙法制定運動と、等級制選挙法の町村議会で、二級民が団結する二級民団運動を呼びかけていたことを知り、千葉県出身者の社会主義運動の研究をした⁽¹¹⁾。

また秋葉街道及び秋葉信仰の研究をはじめ⁽¹²⁾、そこから幕末の「ええじゃないか」の研究⁽¹³⁾に深入りするようになった。東海地方の「ええじゃないか」においては秋葉三尺坊の御札が伊勢神宮の御札降りより多かったからである。

2 片山潜の三倉村同志への書翰

閑話休題。1914年の第二インタナショナル大会に片山潜が出席することを三倉村の中川栄太郎に

(9) 杉山金夫「遠州三倉村と明治社会主義」、及び「新たに発見された幸徳秋水、片山潜等の書簡」（ともに『静岡県近代史研究』創刊号、1979年）、杉山金夫『静岡県社会運動史研究』（杉山金夫遺稿集刊行会、2004年）所収。

(10) 近世の関東東北地方からの伊勢参詣日記を分析すると、日記を書いた伊勢参詣者の8割が、掛川宿からの秋葉街道経由であった。拙稿「近世のお伊勢参り道中日記一覧」地方史静岡刊行会『地方史静岡』29、2001.04、pp.57-75。

(11) 拙稿「明治末期の村落社会主義——座間止水と二級民団運動——」静岡県近代史研究会『静岡県近代史研究』5、1981.05、pp.102-117、「村落社会主義の周辺——吉田璣・白鳥健と千葉県社会主義運動——」『静岡大学教養部研究報告』人文・社会科学編、17-1、1981.09、pp.1-40、「社会主義者吉田璣と網走の『北拓新聞』北海道史研究会『北海道史研究』30、1982.10、pp.28-31。

(12) 拙監修『秋葉信仰』雄山閣出版、1998、その他。

(13) 拙著『ええじゃないか始まる』青木書店、1987、最近作「「ええじゃないか」の東進——遠江・駿河・伊豆——」日本大学国際関係学部国際関係研究所『国際関係研究』28-4、2008.02、pp.357-395。

知らせてきたのは、堺利彦である。7月19日付の書翰がそれで、餞別の拠出を依頼したものである。

「突然ながら一筆呈上いたし候

今回片山潜奥国井シナに於ける万国社会党大会参列旁に欧米漫遊の途に上られるにつき、友人中より各自相応の会費を拠出し全君に贈呈して別意を表し度と存候、貴下おかれても何卒右御賛成の上何分御出金成下され奉願上候、御送金は片山氏へ直接にても宜敷候へとも、小生手元へ下され候ても宜しく小生手元に集まり候分は、一纏めに致して目録を附し小生より片山君の笑覧に供し申すべく候 匆々敬具

七月十九日 堺利彦

中川栄太郎君

(封筒裏) 成るべく来廿五日迄に御返事願上候 (売文社印) (中川 [42] ⁽¹⁴⁾) すぐに片山潜からも書翰が届いた。7月21日付の中川栄太郎 (英太郎と誤記) 宛の書翰である。

「拜啓 貴下益御清榮奉賀候扱小包で一冊の書籍を送りましたが、あれは安部君の名前で発行はしても実際は僕が翻訳したのでしたから差上げた訳です ⁽¹⁵⁾。頗る有益のものです。次に僕は今度八月廿三日から開ける万国社会党大会 ⁽¹⁶⁾ に行つて見たいと思つて今僕の家を売らんと尽力して居る所です。多分来月の始二日頃に行く考へです。日本に居ても仲々生活が出来ないから一つ万国に向つて日本の社会党の事情を訴へたり進んで僕の一身の方法をも講じたいと随分苦しい犠牲を払つて行ふとしている所です。

七月廿一日

中川英太郎様 片山潜

旧森下藤一郎君へ宜しく (中川 [13])

この書翰の5日後の7月26日にも葉書を出している。

「拜啓 此間御手紙を頂戴致しました時には僕より申上げましたあとでしたからお分りの事と存じまして失礼いたしました。

次に出来 (発か) は愈来月二日に定めました。新橋より敦賀へ出て行く考へです。右は一寸御報知迄早々

七月廿六日 (中川 [14])

片山は敦賀から乗船し、シベリア鉄道でヨーロッパに向かう予定だったようだ。その前に中川は

(14) 杉山金夫『静岡県社会運動史研究』(杉山金夫遺稿集刊行会 2004年) 所収。以下中川家文書及び小野家文書の文書番号は、本書による。

(15) 『労働問題及サンディカリズム』(安部磯雄訳大日本文明協会、一九一四年六月)で内容は、トマス・シュール・アダムスとヘレン・エル・サムナーの共著の「労働問題」とアーサー・クレーの「サンディカリズムと労働」の翻訳である。中川家には、「進呈 中川英太郎君、大正三年七月廿日片山潜」と署名された同書がある。

(16) オーストリアのウィーンで開催を予定されていた第二インターナショナルの大会。実際には第一次大戦勃発のため中止された。

なにがしかの饒別を片山に送ったのではないかと思われる。片山は7月28日付で、また書翰を送っている。

「拝啓 貴下益御壮栄奉賀候扱今回は僕が旅行致すに附大変御配慮を蒙り御厚意の段難有ぞんじます。此不景気の際にも拘はらず斯く御寄附下さいましたことは此上なき仕合です。僕も今度は是非海外の同志に訴へて一つ僕の排(ママ)水の陣を張って奮闘致す決心ですから何卒御承領(ママ)を願ひます。

尚ほ僕は愈来る八月三日新橋発午前八時三十分の汽車で敦賀に行き夫よりウラジル港に渡致します此時であれば静岡で一寸はお目に掛かれるかと存じますが、之は静岡の同志佐々井辰次郎(静岡市南安東千四百〇四番の四)に聞き合すか、又は旅行案内で分ります。

併しお気の毒ですからお目にかからなくとも御芳志は忘れません。又出来る丈ケ通信も致します。

尚ほ森下藤一郎氏へ宜しく、僕は多忙で失礼して居ますから、右は早々 不一

七月廿八日

片山潜

中川栄太郎様」(中川〔15〕)

東京出発は8月3日付で知らせている。ところが予定に変更があったらしい。その連絡を7月29日付にて葉書で知らせている。

「拝啓 此間の書面に三日に東京を立つと申し上げましたが種々の事情が出来て三日には間に合はないかも知れないから左様御承知願ひます。併し慥かの事は追って申し上げます。右は一寸お知らせします。都合によれば二三日後れるかも知りません。 潜

七月廿九日」(中川〔16〕)

ところが前述のように、ウィーンでの第二インタナショナルの大会は中止された。そこで片山は渡欧計画を渡米計画に変えた。次は8月25日付の書翰である。

「拝啓 戦争の爲め欧州行きは不可能となりました故今度は来る九月九日に横浜出帆の佐渡丸にて渡米致す事に相定ました。右御知らせ致します。実はシベリヤ行に致せは静岡にてお目にかゝれる事と楽しんで居ましたが止を得ません。何卒御自愛を遊されて御気嫌よう！写真を一葉記念のため差上げで(ママ)置きます。右ハ早々 不一」(中川〔17〕)

こうした片山は9月9日に横浜から佐渡丸でサンフランシスコに向かったのであった。残念ながらこの写真は残っていない。

翌1915年1月1日、かつて片山とともに三倉村を訪問した名古屋在住の鈴木楯夫からの書翰が届いている。

「謹賀新年

御地へ参りましてから最早七八年になります。月日のたつのは早いものではありませんか。其内に幸徳君は去る、片山君は米国に逃げる、運動は中止となる、然し吾人の蒔いた種は必ず生きるであらうと思ふ、あの、御地へ参りましたとき、帰りに馬車を止めて見舞ふた病床にありし御方は御無事でありますか、提灯屋の一家は如何になりました。嗚呼、顧みると夢の様です。斯して一日、一日を送り社会の進化を助く可きか、貴家の前に谷水の流れかあって、後ろが山であることをも今も記憶して居ります。」(中川〔25〕)

鈴木楯夫については、伊藤英一氏の詳細な研究（評伝・鈴木楯夫 名古屋社会運動の先駆者、ブックショップ「マイタウン」,1997）がある。

さて片山潜のアメリカからの書翰は残っていないが、雑誌『平民』が送られてきており、これに同封された書簡があったのではないと思われる。片山潜がモスクワに移ってから、交流があったかもしれない。

3 『平民』の発行

1916-1919年に、片山潜がアメリカで発行した『平民』については、岸本英太郎・渡辺春男・小山弘健『片山潜 第二部』（未来社 1960年）は、「特別要視察人状勢一斑⁽¹⁷⁾」や堺利彦の『新社会』に掲載された消息などから、1号から16号までの発行号数と年月を推定している。これに関連して、法政大学大原社会問題研究所が、「在米日本人社会主義者の機関紙『平民』について」（無署名、『資料室報』84, 1962.12, pp.1-16）で、館蔵資料について紹介した。

前述したように、1977年に静岡県社会運動史の研究者である故杉山金夫氏が、中川家及び小野家で幸徳秋水・片山潜関係の史料を発見されたが、そのなかに片山がアメリカから送ってきた『平民』誌が含まれていた。わたしも知らせを受けて、学生たちとともに史料の整理に当たった。ちょうど片山潜の伝記を執筆中の志賀義雄氏も、わたくしどもの何回目かの調査に同行されたことがあり、当時未発見の『平民』5号が含まれていたことから、その発見の意義を高く評価された⁽¹⁸⁾。

その後宮崎大学（現在九州大学）の山内昭人氏のアメリカ・オランダにおける詳細な調査により、アメリカにおける片山潜の活動の全容が判明した⁽¹⁹⁾。1989年山内氏は、オランダのアムステルダムにある社会史国際研究所スネーフリート文庫所蔵の第1号から第6号までを復刻・公表されている⁽²⁰⁾。

片山潜は渡米して以来、しだいに思想的変化を生じたようで、それが『平民』誌に如実に示されている。もともと片山は、幸徳秋水らの平民社のメンバーではなかったが、アメリカで平民社を創立し、『平民』を発行した。かつての論敵であった幸徳秋水が大逆事件で処刑されたことを悼み、幸徳の闘いを賞賛している。13号では「平民病院」（Heimin biyoin スベルは原文のまま）の訳語として「Proletarian Hospital」を使用しており、「平民」はプロレタリアートの意味でもあった。

(17) 近代日本史料研究会編「特別要視察人状勢一斑, 5-9, 続1-3」『日本社会運動史料』第2集, 明治文献資料刊行会, 1957-1962。

(18) 志賀義雄「新たに発見された片山潜の手紙と資料」『平和と社会主義』編集委員会『平和と社会主義』695-702, 1979.04.28-06.23。

(19) 山内昭人「片山潜の盟友リュトヘルスとインタナショナル」1-8『宮崎大学教育学部紀要』社会科学, 49-79.1981-1995。のち『リュトヘルスとインタナショナル史研究——片山潜・ポリシェヴィキ・アメリカレフトウィング——』ミネルヴァ書房, 1996。

(20) 山内昭人“Sen Katayama, S.J. Rutgers and H. Sneevliet, 1916-1921: In Reprinting Nos. 1-6 of *The Heimin*”『宮崎大学教育学部紀要 社会科学』66, 1989.09, pp.27-57。こういう資料の紹介あるいは復刻は、現在の出版事情からは、大学の紀要だからこそできることで、学恩に大いに感謝したい。

『平民』は1916年5月、第1次大戦のさなかに第1号が発刊されたが、サンフランシスコでは思いうような活動ができなかったらしく、同年12月ニューヨークに移った。ロサンゼルス野中誠之は、熱心な協力者で、しばしば寄稿しているが、1917年には、「我党支部の如き」（15号）とされ、また一時編輯を野中に委嘱したようである（17号）。

ニューヨークでは、当初、S. J. Rutgers宅に寄宿した。ラトガーを表記されることもあるが、かれこそ在米オランダ人社会主義者のリュトヘルスであり、山内昭人氏の前掲の力作『リュトヘルスとインタナショナル史研究——片山潜・ポリシェヴィキ・アメリカレフトウイング——』（ミネルヴァ書房 1996年）に詳述されている。

1917年初頭にニューヨーク滞在中の片山潜は、リュトヘルスとともに、トロツキーに会うが、まもなくロシアで革命が勃発すると、その熱烈な支持者になった。1918年6月発行の16号には、冒頭にレーニンとトロツキーの論文を載せ、1918年11月発行の18号では日本の米騒動を報道している。

さらに1919年1月の19号ではドイツのカール・リプクネヒトの宣言を掲載、1919年5月の20号ではかれらの結成したスパルタクス（スパタカスと表記）の宣言を掲載した。この号では朝鮮の三一独立運動への支持を表明している。そして1919年6月の21号では、第三インターナショナル（コミンテルン）の結成宣言を載せている。

『平民』は、片山の自伝『わが回想』上下（徳間書店 1967年）によると、1919年7月の22号まで発行された。このころから片山潜はアメリカ共産党の結成運動に参加したため、自動的に廃刊したのではないと思われる。

ここで外務省外交史料館所蔵の「過激派其他危険主義者取締関係雑件 本邦人之部」（4門3類2項1-1-10）の所収史料を紹介したい。

上記史料所収の機密公第二七号「片山潜ノ活動ニ関シ報告ノ件」（大正六年六月廿二日 在紐育総領事矢田長之助より外務大臣法学博士子爵本野一郎宛）によれば、ニューヨーク総領事は、要視察人片山潜が桑港から紐育に至り、同年4月（6月か）第11号を発行したと外務省に報告し、これはニューヨークでの第3回目の発行であるとしている。この号のことは、ニューヨーク・トリビューン1917年6月18日号に「当地ニ於ケル社会主義者首領ハ日本人革命ヲ起サント云ヘリ」（Japanese are now ready to start revolution, says socialist leader here）と報じていると、第11号とともにその切抜きを添付している。この史料には、ニューヨーク及びサンフランシスコ総領事の報告が多数含まれており、両領事館は、平民創刊号からのすべての号を購入し（その会計報告も一部含まれている）、外務省に送ってきている。しかも外務省は『平民』誌を内務省に移管していることが分かる。なお、ニューヨーク総領事は、片山がニューヨークで頼った「蘭人シーボルト、ジアスチナス、ロットガース」についても探索して報告し（機密送第七号、大正七年九月十六日）、吉原太郎、野中誠之のほか、15号掲載の『平民の友』、17号掲載の木村駒子についても探索している。『平民』を発行する片山潜の活動は、両総領事館の探索の網の中にあつたというべきであろう。

これらは前掲「特別要視察人状勢一斑」の原資料である。

本史料については山内昭人氏の御教示による。

本稿においては、現在確認できる『平民』のリストと総目次を示すとともに、国内外のいずれの資料保存機関にも保存されていない小野家の13号の縮小版を掲げる。

この小野家文書の13号は、附表に見るように現存唯一のものであるので、その縮小版を末尾に掲載する。

1917年のメーデーの記事のほか、安部磯雄、高島素之、在パリの石川三四郎、ハワイの宮本要、名古屋の片桐市蔵からの書簡が掲載されている。他の号には堺利彦、山川均の書簡も掲載されており、日本の運動の情報源を示している。堺らが『新社会』を発行し始めると、重要な情報源となった。同誌はロサンゼルス野中誠之が取次ぎを行っている（12号）。

あとがき

読者各位におかれては、『平民』の未発見号の情報を寄せられることを期待したい。片山潜の書翰や刊行物は、都市部だけではなく、森町三倉村のような山間僻地で発見できる可能性もあると思う。それとともに、「村落社会主義」の思想と運動についても留意してほしい。

本稿の『平民』総目次と13号の紹介が、片山潜を中心とする在米日本人社会主義運動の研究に多少なりとも資することがあれば幸いである。

文中でも触れたが、本稿起草に当たっては、九州大学山内昭人氏の懇切な御教示を頂いた。深く感謝する次第である。

本来なれば、本稿は故杉山金夫が書く筈であった。杉山金夫遺稿集刊行会を興して『静岡県社会運動史研究』を編纂したものとして、代筆の努力をしたまでである。

(たむら・さだお 静岡大学名誉教授)

『平民』現存号所蔵先と総目次

凡例と付記

- 1 現存号のリストのうち、大原とあるのは法政大学大原社会問題研究所所蔵（資料番号839-11）で、うち現存分は15号～21号で（原物と表記）、他はコピーまたはネガフィルムである。残念ながらコピー及びネガフィルムの号の原蔵者は記録されていない。そのほか岸本・渡辺・小山前掲著の推定分も掲げ、オランダは、山内氏が復刻されたアムステルダム社会史国際研究所スネーフリート文庫所蔵を指す。外務省総領事館報告については、本文の11号の解説を参照されたい。
- 2 発行元
 - 1号～6号 サンフランシスコ市パイン街2204で発行。
no.2204 Pine st. San Francisco, Cal.
 - 7号～14号 ニューヨーク市チャーチ街30で発行。
Care of Mr.Rutgers 30 Church st. New York,N.Y.
 - 15号～22号 ニューヨーク市ブロードウェイ1947番地628号室で発行。
Room 628,1947 Brore way,New York,N.Y.（17号：編輯担当 カルフォルニア州ロサンジェルス市サンペドロ街218野中誠之）
S.Nonaka,218 s,San Pedro St.Los Angeles,CAL,
- 3 大きさ、創刊以来、縦21.3センチ、横12.8センチの3段組であるが、ニューヨーク発行の8号からは、縦31センチ、横23.8センチの3段組である。英文はいずれも横2段組である。
- 4 ページはサンフランシスコ時代は8ページ（2号は10ページ、6号は12ページ）であったが、ニューヨークに移ってからは、4ページであった。各号ともページが打ってないために、コピーのみであると錯乱を生じる。また英文ページが、最初はページ順であったのに、途中から逆ページになっている。綴じたものを2ページ分コピーされている場合、1ページ目と最終ページ（4ページあるいは8ページ）が、同じ紙にコピーされている。左半分は1ページ目だが、右半分が最終ページであることに注意しなければならない。別の号を同じ紙にコピーしてある例もある（左半分は12号1ページ目、右半分は10号4ページ目）。このようにコピーに若干混乱があるので正した積りだが、わたしの整理が間違っているかも知れない。後考を待つ。
- 5 年号の誤記、ニューヨークに移った8号から16号まで「大正」を「大政」としている。
- 6 署名の「深甫」は、片山潜の筆名で、『東洋時論』以来使っている。
- 7 価格は1部50セントであるが、21号から1ドルに値上げされた。
- 8 封書表書
 - (1) 13号の封書表書
静岡県周智郡旧三倉村（現森町）の小野家には、次の封書が残っている。
小野〔10〕1917(大正6)年11月19日付(小野藤一郎宛封書 無署名)
(宛先) Mr.Toichiro Ono, (小野藤一郎様)
Mikuramura Suchi gori, (三倉村, 周智郡)
Shizuoka ken, Japan (静岡県, 日本)
(消印) New York N.Y.

Oct 19 11PM 1917

消印の年月日から見て、『平民』13号が送られてきた封書と思われる。

(2) 21号の封書表書

静岡県周智郡三倉村（現森町）の中川家には、次の封書が残っている。

中川〔36〕1919年(月日不明)(中川栄太郎宛封書 無署名)

(宛先)Mr. Eitaro Nakagawa

Mikura Mura, Shuchi Gori, Shizuokaken, Japan

(三倉村, 周智郡, 静岡県, 日本)

(消印不明)

これは1919年6月発行の『平民』21号が送られてきた封書ではないかと思われる。

9 附表の所蔵先略号

大原：法政大学大原社会問題研究所

山内または山内論文：山内昭人 “Sen Katayama, S.J. Rutgers and H. Sneevliet, 1916-1921 : In Reprinting Nos. 1-6 of The Heimin”, 宮崎大学教育学部紀要 社会科学, 66, 1989.09, pp.27-57

オランダまたはアムステルダム：社会史国際研究所スネーフリート文庫

中川家：静岡県周智郡三倉村（現森町）中川栄太郎の御子孫

小野家：静岡県周智郡三倉村（現森町）小野藤一郎の御子孫

(なお、中川家及び小野家所蔵分は、法政大学大原社会問題研究所にコピーを寄贈しておいた。)

10 附表への注記

・岡繁樹 10号から登場する岡繁樹については、加藤哲郎「反骨の在米ジャーナリスト岡繁樹の1936年来日と偽装転向」20世紀メディア研究所『インテリジェンス』第4号、紀伊国屋書店、2004.05、が最新の研究である。

・13号のHeimin biyojinは原文のまま。

・15号3面、「●南加平原の大館君から「平民の友」を寄送された」とある。

附表に示す通り、『平民』誌は、全22号分のうち、まだ7号、11号及び14号が発見されていない。同誌はアメリカでの発行であり、アメリカの国立公文書館等が所蔵している可能性がある由である。もちろん日本国内でも、今後の調査が必要であることはいうまでもない。

なお、小野家文書にあるCALL紙（1910年6月3日・金曜、Vol.3, No.154）も片山潜から送られてきたもののようであるが、これにはアメリカの労働者階級の新聞と銘打たれている。山内氏が前掲書で分析されたアメリカの共産主義者グループのCALL紙が、1918年でVol.11であり、号数を引き継いでいることが明らかである。ただし断片のため、小野家目録からは除き、上記杉山金夫遺稿集解説で紹介した。

附表1：『平民』所蔵状況一覧

号数	発行年月	判型	頁数	大原	岸本推定	オランダ	山内	中川家	小野家	未発見	外交史料館	発行元
1	1916.05	小	8		推定	原物	山内					サンフランシスコ市 パイン街2204 no.2204, Pine st. San Francisco, Cal.
2	1916.06	小	10		推定	原物	山内					
3	1916.07	小	8		推定	原物	山内					
4	1916.08	小	8		推定	原物	山内					
5	1916.09	小	8		推定	原物	山内	原物				
6	1916.11	小	12		推定	原物	山内					
7	1917.02		不明		推定					未発見		ニューヨーク市 チャーチ街30 S.Katayama, care of Mr. Rutgers 30 Church St. New York, N.Y.
8	1917.03	大	4	コピー	推定			原物				
9	1917.04	大	4	コピー								
10	1917.05	大	4	コピー	推定			原物				
11	1917.06	大	4		推定					未発見	総領事館	
12	1917.08		不明	コピー								
13	1917.10	大	4		推定				原物			
14	1917.12		不明							未発見		
15	1918.04	大	4	原物								ニューヨーク市 ブロードウェイ 1947番地628号室 Room 628, 1947 Brore way, New York, N.Y.
16	1918.06	大	4	原物								
17	1918.08	大	4	原物								
18	1918.11	大	4	原物								
19	1919.01	大	4	原物								
20	1919.05	大	4	原物								
21	1919.06	大	4	原物				原物				
22	1919.07	大	4	コピー								

判型 小：21.3cm×12.8cm, 大：31cm×23.8cm, いずれも3段組

大原：法政大学大原社会問題研究所所蔵

岸本推定：岸本英太郎・渡辺春男・小山弘健『片山潜 第二部』未来社,1960年, 在米日本人社会主義者の機関紙『平民』について,無署名,資料室報.84,1962.12,pp.1-16,

オランダ：アムステルダム社会史国際研究所スネーフリート文庫

山内：山内昭人“Sen Katayama,S.J.Rutgers and H.Sneevliet,1916-1921：In Reprinting Nos.1-6 of The Heimin”,宮崎大学教育学部紀要 社会科学,66,1989.09,pp.27-57

中川家：静岡県周智郡三倉村 中川栄太郎受領

小野家：静岡県周智郡三倉村 小野（旧姓森下）藤一郎受領

総領事館：「過激派其他危険主義者取締関係雑件 本邦人之部」（外務省外交史料館 4門3類2項 1-1-10）

17号の編輯担当：カルフォルニア州ロサンジェルス市サンペドロ街218野中誠之

附表2：『平民』現存号所蔵先と総目次

号数	発行年月	頁数	記事
1	1916.05	8	アムステルダム・山内論文
		1面	(創刊の辞) (広告) 浮世顧問 浮世顧問事務所 片山潜・植山治太郎
		2面	加州日本人農園経営に就て 露都山人 / (都々逸7首) 与太郎の歌(暮) / (短歌4首) 幽女
		3面	羅府より 野中誠之 / 桑港協友会 / 証明館の引張り館!
		4面	思想と争闘と事実と 千葉利 (5面につづく)
		5面	(4面からつづく) / 同志の消息 平井櫻川君 (在サンディゴ)
		6面	英文 (7面からつづく) / Labor Unions among Jap workers in America / Co-operate Laundry / Domestic Workers in Deadly Competition, 編輯便 / 定価5 仙, 一ヶ年50仙前金の事, 桑港パイン 2204 平民社

		7面	Anti-Jap, Movement, The Picture-Bride (7面につづく)
		8面	Editorials
2	1916.06	10	アムステルダム・山内論文
		1面	日本の税制概観(上)(2面につづく)
		2面	(1面からつづく)世界人と日本人 羅府 野中誠之/同志の消息 仏国リアンタールより 石川三四郎(3面につづく)
		3面	(2面からつづく)石川三四郎氏通信ノ続キ
		4面	太平洋通信社員笠井重治君足下/(狂歌8首)与太郎の歌(暮)/本誌の定価
		5面	平民論(横浜正金銀行批判, 桑港日本人批判, 松尾音吉批判)
		6面	人種利己心鼓吹の害毒 深甫/デーリーク屋の自覚を望む 潜
		7面	Art Smith and Jap. workers / Government by police in Japan
		8面	Editorials (9面につづく)
		9面	(10面からつづく) / Threatened with strike
		10面	A letter from Dr. Kautky / A letter from Italy
3	1916.07	8	大原・アムステルダム・山内論文
		1面	桑港日会の警告文, 東洋汽船/浮世顧問
		2面	リーツク子ヒトの演説 小穴生訳
		3面	日本の税制概観(中) 錦城生/笠井氏の答へにママしひて(つづく)
		4面	在留同胞に必要な事 深甫/『新社会』の労働者の詩 正吉
		5面	(6面からつづく)
		6面	Why there have been no labor union among Japs in America?
		7面	Dr. Hyndman's letter ((old date: Jan. 23. 1915) / テキサスより 沼野治英(7月14日) / 編輯便り
		8面	Editorials (7面につづく)
4	1916.08	8	アムステルダム・山内論文
		1面	在留邦人に必要な事 深甫/民衆運動と避妊運動
		2面	笠井重治氏の答へについて 千葉生/平民短評 タゴールの爺さん 千葉利/編輯便
		3面	社論 邦人労働者と白人の組合/山崎官補の栄転/邦人の実力とは何ぞ/協友会幹部の保善
		4面	日本の税制概観(下) 錦城生/痛快な御見舞品 羅府 野生/羅府新報記者の稚気
		5面	(6面からつづく) / Japanese in America
		6面	Dr. Hyndman's letter continued from the last number (5面につづく)
		7面	Militarism and youths in Japan, A warning to American youth /
		8面	Editorials
5	1916.09	8	アムステルダム・山内論文・中川家(原物)
		1面	何故に日本政府は社会主義者を圧迫するか(2面につづく)
		2面	茅原華山先生 深甫
		3面	全米鉄道労働者の大ストライキ 羅府 野中誠之(4面~5面につづく)
		4面	(3ページからつづく) 茅原先生無茶苦茶論 千葉利
		5面	(4ページからつづく)
		6面	桑港協友会对男爵渋沢栄一 鈴木文治氏に質す 潜
		7面	(8面からつづく) / Militarism and Youths in Japan again
		8面	Editorial Notice / Contents in Japanese / Strike at Yokohama Shipyard (7面につづく)
6	1916.11	12	アムステルダム・山内論文
		1面	元老横暴を極めて憲法を踏みつけ天皇の明德を蔽ふ/在留同胞に必要な事 深甫 第二 日本労働者の団結(2面につづく)
		2面	閻魔帳に就きて 鶴城生/ホエア, アル, マイ, チルドレン 羅府 野生(3面につづく)
		3面	(短歌3首)空(暮) / (無題) 羅府二本松生 / (短歌5首) 桜井時代 / ▲(短評) 潜(4面につづく)
		4面	(3面からつづく) / 平民短評千葉利 / 『平民』十二月号は僕が東行の為め休刊します。片山潜
		5面	同志の消息 9月17日石川三四郎/北村直哉(野中誠之宛) / 野中誠之/在米日本人労働組合成る 潜(6面につづく)
		6面	平民短評(二) 千葉利 / 協友会对渋沢男(鈴木文治氏から一切の説明を聞くまでは沈黙を守るという内容) 潜 / 友愛会の陋劣(『新社会』10月号の山川均「日向ぼっこ」の一部転載)

		7面	在米日本人労働聯合会を評す 桑港一労働者／在米邦人労働界の急務／広告「僕は運動上の都合により本月末紐育に行きます此段平民の読者諸君及び辱知諸君に御知らせ致します 尚ほ僕への通信は紐育市チョーチ街三十番ルトガー氏宛に願ひます 十一月 片山潜」
		8面	To My Reader and comrade／Notice : My mail address in New York ; care of Mr.S.J.Rutgers. 30 Church St.New York,N.Y. S.Katayama
		9面	(10面からつづく) ／The First Task of The New Union
		10面	(11面からつづく) ／Socialist movement in Japan (10面につづく)
		11面	(12面からつづく)
		12面	Editorials (11面につづく)
7	1917.02	不明	未発見
8	1917.03	4	大原 (コピー) ・中川家
		1面	社論 (露国革命の教訓, 米独国交断絶と社会党の活動, 社会党大会, 労働組合と米独戦争, 純左翼党の機関雑誌) 片山潜 (2面につづく)
		2面	戦争の終局／リープク子フトの書面／羅府より 一本松生／
		3面	New labor association in Osaka／Iron workers strike／Notice to the readers!／Notice to the readers! S.Katayama,care of Mr.Rutgers 30 Church St.New York,N.Y.
		4面	Comrade Toshihiko Sakai.The socialist candidate for Tokyo／Socialist comrade at home／Labor is awakening in Japan (3面につづく)
9	1917.04	4	大原 (コピー)
		1面	田川大吉郎氏不敬事件の真相／共和主義の勝利独逸に及ばん／露国革命に燃ゆ／佐藤大使の社会観／山路愛山の死を悼む／僕は臆病者だ 片山潜 (2面につづく)
		2面	(1面からつづく) ／桑港通信 折茂吉太郎 (3月29日) ／羅府より 一本松生 (3月末日) ／リープク子ヒトの書面 (承前) ／母国社会党の進歩
		3面	The China best interest／Fukey Jinhon／Is England fighting against the German Kaiser or Russian Socialist?／Movement at home (4面につづく)
		4面	(3面からつづく) ／Labor market is busy in Japan／Nine hundred miners burnt to death／Imperialism and workers in Japan／Fusataro Ota still in prison at Yokohama／Labor movement in America／Strike in Japan／Notice to the readers S.Katayama,care of M.S.J.Rutgers,30 Church Street,New Kork,N.Y.
10	1917.05	4	大原 (コピー) ・中川家
		1面	全欧州の大火 野中誠之／労働者諸君に告ぐ (2面・3面につづく)
		2面	(1面からつづく)
		3面	(1・2面からつづく) ／桑港通信 岡繁樹／砂港通信 一同志／
		4面	Our position／Kidnapped Fusataro Ota released after 15 month of imprisonment／Socialist votes in Tokyo／The labor strike and police in Japan／ Watchfires／Small farmers under militarism in Japan／Notice to the readers／
11	1917.06	不明	未発見, 外務省外交史料館「過激派其他危険主義者取締関係雑件 本邦人之部」(4門3類2項1-1-10) 所収の同号抜粋により発行を確認
12	1917.08	4	大原 (コピー)
		1面	石井特使に告ぐ／在加奈太日本人漁業者諸氏に告ぐ 新育・片山潜 (7月25日) ／購買組合 (2面につづく)
		2面	(1面からつづく) ／日本社会主義者の活動／安部磯雄君の友愛会観／社告 発刊の後れた理由 (3面につづく)
		3面	(2面からつづく) ／日本労働党組織さると／社会政策実行相成る／堺利彦氏より (6月12日) ／長崎三菱造船所の罷工／茅原華山の商業観 (5月26日日米週報) ／特別広告『新社会』 「米国取次所」野中誠之 日本唯壹の社会主義者の雑誌なり／Comrade Nonaka,Los Angeles ,Cal.,sent us news about a great strike at Mitsubishi Ship Yard at Nagasaki. S.K.
		4面	Asiatic labor in America／Fishermen in Canada／From the Heimmin readers
13	1917.10	4	小野家
		1面	喜ぶべき故国労働界の現象 野中誠之／決議 (1917年労働祭 東京に於て 日本社会主義者団)
		2面	血迷つたる桑港新世界 (片山潜渡欧旅券下付不許可) ／安部磯雄書簡 (8月13日付) (3面につづく)

		3面	(2面からつづく) / 日本通信 売文社 高畠素之君より (7月7日付) / 堺利彦君より (8月6日付) / 仏国通信 石川三四郎より (8月29日付) / 布哇通信 宮本要君より / 名古屋 片桐市蔵君より
		4面	Diplomats' Japan and the workers' real Japan / Effect present war on Japan / Labor strike in increase / Shinshakai (New society) / Heimin biyoin (Proletarian Hospital) / Notice to the readers
14	1917.12	不明	未発見
15	1918.04	4	大原・小野家
		1面	1面 社会革命党宣言書 / (短歌7首) 南加州 藤川団子 / 日本に社会主義起る乎 片山生 (2面につづく)
		2面	在米日本人に真の愛国心ありや 片山生 / 我党の消息 片山生, ●小川金次君●岡君●植山君●南加平原の大館君 ●羅府の野中兄●昨年日本へ帰つた川村君●活版所 (3面につづく)
		3面	(2面からつづく) ●日本兵の浦塩上陸●欧州戦争●紐育の日本人会●伊藤道夫君 / 日本に於けるボルシェヴィキの伝染 / 「平民」の発行所 紐育市ブロード井イ一九四七番六二八号室 平民発行所, Room 628, 1947 Brore way, New York, N.Y. / 社告 「我党支部の如き」野中誠之の住所 羅府サンベドロ街二百十八番, 『新社会』取次ぎも依頼, 3月号紹介 / 英文 (4面からつづく) Police barbarism in Japan / Sakai and three other comrades were arrested / To the readers"
		4面	When will pace / Japan and Russia in the far east / United fishermen of British Columbia (3面につづく)
16	1918.06	4	大原・中川家
		1面	社会主義の種類 ニコライ・レニン エスケー生訳 (片山潜), 労働者執権の予期 トロツキー, イー・ケー生訳 (片山潜) (2面につづく)
		2面	(1面からつづく) / 日本通信 山川均からの書簡 (5月25日付) (3面につづく)
		3面	(2面からつづく) / 葉落ちて 日本からの筆者不明書簡 (4月26日付) / 社告 (通信先 ブロードウ井イ) / 英文 (4面からつづく) / Bolshevism Contagious / Notice
		4面	Will Japan invade Siberia? / Japanese fishermen's strike / Mining industry miners in Japan / Condition of socialists in Japan (3面につづく)
17	1918.08	4	大原
		1面	露国は真に共和国だ 片山生 / 木村駒子女史に会う 片山生 / 汗のしずく
		2面	我が党名如何 (ニコライ・レニン) / 与謝野晶子と社会主義 / 編輯者より
		3面	笑蛙漫言 (其一) / 評 欧州大戦 笑蛙 / 紐育通信 一家内労働 (ママ) 者 / 羅府より 野中誠之 / 編輯者より (通信先変更) S.Nonaka, 218 s, San Pedro St. Los Angeles, CAL,
		4面	Tom Moony, The present attitude of the Japanese towards Russia / Japan's exclusion and anti-foreign ideas / A Japanese working men's association in N.Y. / Notice
18	1918.11	4	大原
		1面	米一揆の与えたる教訓 9月29日 深甫 / 革命は来れり 幸徳秋水
		2面	笑蛙漫言 / ア、平民内閣 (3面につづく)
		3面	(2面からつづく) / 米国の権利ありや 野中 / (英文記事) (4面からつづく)
		4面	Rice riots and a new meaning (S.K.) / The rice riots in Japan (E.K.) / 英文書簡 E.K. (3面につづく)
19	1919.01	4	大原
		1面	リープク子ヒト一派の革命宣言 (以下4面につづく)
		2面	羅府庭園業組合と購買組合 / モップ私語 / (一言集)
		3面	獄中より 吉原太郎 / 米騒擾の後 笑蛙 (4面につづく)
		4面	リープク子ヒト一派の革命宣言 (1面からつづく) / 米騒擾の後 (3面からつづく) / 米国人の見たる日本人 / 同志の消息 早川馬洗氏 / 吉原太郎のアドレス (英文ページなし)
20	1919.05	4	大原 (2部)
		1面	スパタカスの宣言 (スパルタカスを誤記)
		2面	日本社会党の態度 片山潜 / 新文明の勃興 (2面につづく)
		3面	(1面からつづく) / 尾崎行雄と安達謙蔵 / 朝鮮民の独立運動に同情す / モップ私語 野中生
		4面	Korea and Korea's independence / Suffrage demonstration / "Royal socialist party" was formed in Japan / Racial equality
21	1919.06	4	大原・中川家
		1面	共産党宣言 第三インターナショナル (3面につづく)
		2面	(1面からつづく)

在米片山潜が発行した『平民』について（田村貞雄）

		3 面	(2面からつづく) / モップ私語 野中生 / 巴里通信 (吉原太郎からの書簡) 片山生 / 聯合諸国露国干渉の愚劣 / 米国社会党の分離派問題
		4 面	Who are the Russian people? / (広告) The labor movement in Japan, by Sen Katayama, price \$1.00, The Hei-Min Office, Room 628, 1947 Broadway, New York City,
22	1919.07	4	大原 (コピー, 原本: 同志社大学人文科学研究所と伝承されているが, 同研究所のみならず同志社大学図書館には所蔵されていない)
		1 面	労働者諸君に警告す (2面につづく)
		2 面	(1面からつづく) / モップ私語 野中生 (3面につづく)
		3 面	(2面からつづく) / 英国より 吉原太郎 (片山宛書簡) / (英文2行) (4面からつづく) / Labor paper's / Siberian news Japanese dailies / A Japanese at Moscow communist congress
		4 面	A letter to Japanese workers / Socialism in Japan / Bunji Suzuki and the labor movement in Japan / New and old socialist periodicals (3面につづく)

平民

大政六年拾月
第拾參號
主幹 片山潜

●喜ぶべき故國労働界の現象

野 中 誠 之

近頃日本の各種労働者が一致團結の力を以つて、自己の權利を擁護せんとする現象を表はしたのには、實に喜ばしいことである。今吾人の机上にある一週間の東京朝日新聞に記載されたるストライキだけでも、左記の多種に達して居る。

七月二十九日より、富士紡績會社男職工二百五十名賃銀値上げの要求入れられず同盟罷業す。而して千八百餘名の女工は男工罷工の爲め自然休業を止むなくして喜ぶ。

八月一日より相州平塚町アームストロング會社職工七百餘名賃金二割の値上げ要求入れられず罷工す。

八月四日より福島縣下野田炭鑛夫賃金値上げを要求して罷業。

八月五日東京市水道第二期貯水擴張課の入夫百餘名賃金値上げを要求し罷業を開始す。

右の外吾人がまた耳新しく残つてゐるだけでも、東京毛織會社といひ長崎の三菱造船所の大ストライキを初め、八月二十七日より東京第一の印刷工場たる東洋印刷株式會社及び秀英社の雇員相呼應して賃金値上げを要求して総同盟罷工を開始せることを日米新聞は報じて居る。

然して此等のストライキは大部分労働者の勝利を以て終結したのは殊に喜ぶべきことである。由來日本の労働者は自己の權利の上に眠つて居る。而して先覺者は以て任ずる人士でさへも、封建時代の遺風謂ゆる温

情なる主従の關係をもつて、何時までも労働者を律せんとしてゐた。又現在日本における唯一の労働團友愛會の會長を以て、資本家と労働者の調和など、昔時の主従關係を脱却せぬ姑息の妥協論をもつて労働者を馬鹿にせんとしてゐるが、併し労働者も何時までもそんな砂糖水に酔はされてはゐない。今や彼等は自覺訓練の時代に一歩歩み入らんとしてゐるのである。

然るに仲小路農相の如きは、ストライキを不法不心得の所業とし、労働組合の弊害を云々して職工の向上を望むかど、言つてゐる。吾人日本人は如此時代後れの者を國務大臣としてゐるかと思へば甚だ心細い次第ではないか。労働者のストライキを罪惡視したのは十九世紀初頭のことで、今やストライキは雇傭條件改善の爲めの労働者の權利といふことに確定してゐるのである。又労働組合の弊害を説くも、労働組合は決してストライキを奨励する機關では無い、米國におけるストライキの統計をみても、勢動組合の成立以來ストライキは減少したことを識者は認めて居る。ストライキの頻發を恐るゝよりも、之が抑制機關となるべき労働組合の起らざるを憂ふべきではないか。過日石井遣米特使は米國上院に於て「諸君は米國民たるべき自由にして吾人は日本入るべく自由なり、即ち日米國民は共に自由の國民たり」と演説してゐるが、吾人は如何なる意味に於て日本國民は自由の國民なるかを解するに苦む。世界が既にストライキを労働者の正當の權利と認めてゐるに之を犯罪行爲とする日本に、等しく日本國民たる労働者には如何なる自由があるか。前に掲げたるア社職工のストライキは初め職工中の巨魁とみべき鳴海、安藤の兩名と共に三十餘名を大磁器に引致し、同夜引續き女工七十五名、火夫十九名及び雜工五十名を除く殘餘の者を悉く拘引壓迫して、職工をして餘儀なく會社の主張の下に屈服せしめたることを東朝は報じて居る。前號の片山君の説にもあつた如く日

本政府は治安警察法を以て總ての労働運動を禁止してゐる。それが爲めにストライキが起れば必らず警察は之に干渉して労働者を抑壓する。然るにも拘らず如此ストライキが頻繁に勃發するのを見て、吾人は遂に故國の労働者諸君の自覺を祝福し且つ益々奮起と努力とを切望する次第である。(九月三日レーバデの休に)

在京の社會主義者は頃日某所に會合し、露國革命に對して、万場一致を以て左の決議を通過し、實行委員をして露都勞兵團を初め各各國社會主義團體に送達せしめたる

決 議

東京に於ける社會主義者の一團は一九一七年のメーデーを期し、露國革命に對して深甚ある敬意と同情を表す。

露國革命は一面に於いては中世的專制政治に對する新興商工階級の政治的の革命を意味すると同時に、他面に於ては近世資本主義に對する平民階級の社會的の革命に向つて更に其歩を轉せしむるは、露國社會黨に任務にして、同時に亦各國社會主義者の責任たり。

各國の資本制度は今や其最後の進化的段階たる資本的帝國主義の過渡期に到達せり。此時に當つて各國の社會主義者は、資本的帝國主義の心理に感亂せらるることなく、萬國主義の原則に確立し、權力階級の爲に浪費されやうある各國平民階級の闘争力を轉じて、其共同の仇敵に向はしむるは、萬國平民階級の歴史的使命を全ふる所以にして、各國社會主義者の任務たり。

故に此機會に於いて戦争即時終決の主張を貫徹し、交戦各國の平民階級を糾合して、其闘争力を轉じて一齊に之を自國の支配階級に向はしむることは露國社會黨の任務にして同時に又各國社會主義者の責任なり。吾人は露國社會黨と各國同志の勇敢と奮闘に信頼し社會主義的の革命の成功を望む。

一九一七年勞動祭 東京に於て 日本社會主義者團

●血迷つたる桑港新世界

八月十八日新世界は東京特電として左の記事を載す。

片山潜渡歐旅券下付不許可

紐育在任社会主義者片山潜ストックホルム萬國社会主義者大會に日本の社会主義者代表者として出席せんため旅券下付を出願中なりしも却下せる旨外務省は發表せり日本の社会主義者と號する一派にては嘗て片山を代表者に推せることなきを以て右却下を當然の處置と做せり

若し之を事實とすれば片山君は實に不都合千万な者と云はねばならぬ。在米の同志や他一般讀者諸君の中には右の記事を讀で奇異の感を抱かれたらうと思ふ。乍併片山君は未だ嘗て旅券下付を出願した事はない。否出願する必要はなかつたのである、出願しないものを却下するとは随分可笑な事ではないか、又「片山を代表者に推せる事なし」とは能くも捏造したものか吾人は在東京の通信者が血迷つたか、又は新世界記者が血迷つたか其何れなるかは知らない。乍併其は何れとしても、新世界が如斯人の信用を妨害、陥落せんとしたる無責任の罪を免るゝことは出来ない。

吾人が日本の同志から最初受取つた代表者の件に付いての交渉の手紙は六月十四日の日附となつてゐる。其には「幸ひ片山君が滞米中故同君を勞はして出席して頂いてはどうかと考へて居ます。同君にも此の由を申送りました。在米の同志からも協力を願ふことが出来れば仕合はせです。」とあつた。片山君の同意を得て其れを日本に書き送つたのは七月半の事をつたゞ記憶して居る。之は堺、山川、高島三君と往復したのであるから若し此の外に日本に社会主義者の一派があるならばいざ知らず、今の日本に堺一派の外に社会主義團體がないのは世間熟知のことである。併して吾人は八月二十四日シカゴのエム夫人から左の如き書狀を受取つた。

A friend in Oakland Cal. wrote me that he had received a word from cable operators [who take the Review at Guam, Honolulu and Manila] that Tokio says a proclamation has been issued by the Mikado that Katayama will not be allowed to attend the Stockholm Conference.

新世界は右グラムの無線電信を故意に偽造したのかも知れない砂港大北日報にも殆んど新世界と同意味の電報を同日に記載してゐるが之も偽造に違いない、何故なれば通信員が斯く下手な文を書く筈がない、右に依つて新世界及大北の記事が全然虚偽なることは明瞭であるか、吾人は八月十三日の東京日日新聞の記事を左に轉載して新世界が如何に世人を欺かんとしたかを明かにしよう。堺、山川の二君は日日記者に語つて曰く

「此大會は殘虐なる戰爭を中止するにあり。最初丁抹、和蘭、瑞典三國の社会黨員が口火を切り國の革命に依つて機を早めたのである。吾々は常に列國の黨員と氣脈を通じてゐるので大會開催期の確定次第代表者派遣の交渉ある事勿論故便宜上在紐育の同志片山潜氏を派遣することに決し既に吾々の決議による信任状までも送達した云々」

右に就き内務省當局は「日本の社会主義者の態度を常に監視してゐる、片山氏は手續上駐米大使館又は領事に對し旅券交付方を申請するであらうが我帝國の主義として勿論絶対にこれを下付せぬ」又米政府の不可許可方針に對しても許すべきでない」と言つて居る。吾人は最後に日本政府に告ぐ、今汝が旅券を下付せないのは汝の自由にする。乍併記せよ、汝の生命は既に最早長からざることを。

拜啓御手紙拜見、御渡米後幾多の困難を経ながら御奮闘の有様を承はり唯、敬服の外無之候御惠贈の「平民」雜誌數部も正に拜見いたし候世界の大勢も大に變化し殊に露國の政變は大に保守主義の人々を驚かしたる事

存じ候小生は今夏「賃銀と生活費」といふ問題につき研究する爲め當經井澤に參り一家を借り子供と共に自賄生活をいたし居り候平素は随分忙しきため意外の御無沙汰いたし候

さて小生の論文に就きての御注意誠に難有拜讀仕候小生は随分多忙なる爲め日本文にても英文にても大意に書く僻ありこれのため少からぬミスラックを仕出かすことも有之候仰の如くEnglishなる語はアノ場合頗る不適當に御座候小生もEnglishといふ語を考へ出さんと試み候も如何なる譯か心に浮び出でず終にテーラントといふ語を輕卒に用いたるまゝ少しも氣附かずして過ぎ申候若し貴臺の友人にして小生の論文を讀みたる人あらば何卒御辨明下され度願上候全く小生の不注意より生じたる過失にて他は理由は無之候

第二日本の勞働運動が社会主義の色彩を帯びる様になりて後政府が大に勞働運動を禁壓し始めたといふことに就き貴臺の御高見は小生熟讀いたし候此点是小生の意見必ずしも貴臺の意見と撞着する處はあき様存じ候小生は日本における勞働運動が社会主義發生以前に行はれてゐたこと、且つ其時に於てすら可なり政府の壓迫を受けて居たことは慥に認むるものに候更に勞働運動が比較的多く壓迫せられて居る時代に於て社会主義の運動が自由でゐたことも認むるものに候然し社会主義の創立が社会主義と勞働運動の最初の結合であつたことは貴臺も御承知の事には候はずや吾等が社会主義の創立を思ひ立つたのは舊日本鉄道會社の矯正會員が貴臺に社会主義的政黨の創立を希望したることが大動機と相成り申候此時に至り政府も始めて社会主義と勞働運動との提携を悟り大に將來を警戒したらしく思はれ候矯正會の解散は必ずしも社会主義が原因であるとは申し難きやも知れず候へ共小生は社会主義創立當時より政府が特別の意味にて勞働運動を壓迫する様なつたことを信じ居り殊に幸徳事件の後に於

て政府が社會主義と勞動運動との接近を恐れ居る事は疑ふべからざる事實に有之候勿論これは政府が勞動運動に社會主義の名を冠らせて之を抑壓せんとする策畧なるやも計り難く候へ共兎に角社會主義といふ口實の下に勞動運動が少からぬ壓迫を蒙り居ることは事實であるが小生は確信仕候小生のツリビーンに送らるる論文は字數に制限ありて此等の点を詳説すること出来ざりしと雖も小生は大体前記の如く了解いたし居り候勿論歴史的事實に就ては何人も多少見解を異にいたし候間若し貴臺にして御地の新聞雜誌に小生の論文に對する御批評を公になし下され候へば誠に幸甚に候先は大略御返事まで如此御座候 八月十三日

片山潜大兄 安部 磯雄

御手紙及びClass Struggle ありがたく御禮申し上げます Class Struggle は、大變面白く讀みました。New Yorker Magazine も毎號讀んで居ります。兎にかく斯うしてレフトウイングのものが益々勢力を得て來るのは羨しい位の愉快な事です。大兄の御活動に引かへ我々一團は不相關漫然として爲すなき状態です。寺内閣内閣になつてから壓制は大分露骨になつて参りました。「新社會」の如きも五六月と共につけ様によられました。郵便局から發送づみのものを横奪して讀者の住所を調べてそれから一々巡查を讀者の家に派して威壓するといふ有様だから折角種々な讀者も又止め行くといつた有様です。尤も此頃は起訴はしない様ですが、實は起訴なしで禁止を食ふ方は我々としては辛らいます。

寺内閣最初の中は大分壓迫を加減してゐたやうですが、選舉で勝つたのと露國革命以來、得意やら恐怖やらで大分神經過敏になつたらしいのです。犬養をどういふ奴は舉國一致とか何とか云つて斯云ふ野蠻内閣と提携してゐるのでからお話になりません。數日以前アメリカから露國へ歸還の途次だと云つて一人の露國

青年が實文社へ立ちよりました。名前は相感失念いたしました。が、エンマゴードマンの仲間が無政府主義者だと云つて居りました。獨逸の帝國主義を破らなければならぬから、即時平和には反對だと云つてゐました。帝國主義なのは獨逸ばかりではあるまいと反問したら獨逸は舊ロシアよりも悪いと申して居りました。無政府主義者には兎かくかうしたタイプが多いやうです。然 兎にかく此ういふ珍客と數人集つてビールを傾けながら話することが出来たのは太變愉快でした。我々も之から御命令に従ひ、チヨク／＼日本の事情を外國に知らせ度いと思つてゐます。メイデイには山崎君宅で小集を催ふし露國への祝文を決議致しました。兄の方へも一部送はつたづです。から何うかして先方へ届くやう御盡力願ひます。我々も下らぬ商賣が忙しいので思ふやうにはだらけぬのは残念です。米國から露國へ派遣されたラッセル一團が歸國の途中国日本へ立よるさうですが帝國主義化した彼等の事ですから寄せて我々とは没交渉でせう。ストックホルムの國際大會には大兄に出てもらへると善いのですが何ぞか方法はないものでせうか。今日の新聞で見るゴリーブクテヒト及びアドラー〔暗殺者〕の兩人が露國勞兵會の名譽會員に指名されたとか。支那は復辟とか何ぞか云つて大モメの姿。 七月七日 實文社 高 島 素 之

●堺利彦君より

一、ヘンダソンから別紙の電報が貴兄宛て來ましたけれど、ヘンダソンの態度も氣に入らず、それに金も掛ることだから返事もせずに置きました。

一、我々の決議がインターナショナル誌に載つたので皆々大いに愉快がつて居ります。

一、貴兄の「平民」も大いに發展の様子、我々の消息も悉く御報導下され、有りがたく存じます。

一、ストックホルムに貴兄に行つてもらふと面白いがと皆々申して居ます。

一、クレンスキーが辭職したといふ電報が昨日來た。大ぶんコンザツと見うけられます。何としてストックホルムの大會で社會黨の勢揃ひが出来ないものか。實に齒がゆくて堪らない。 八月六日

片山 兄 こそん

●佛國通信 石川三四郎より

平民八月號が着きました。相變らず御奮闘の段敬服して居ります。同號に御報告なされし紛失郵便物見當りましたか。昨年暮からといふものは私の發する手紙も通信(新聞への)も三分の二は没収されて居ます。最も力を入れて、精確な材料によりて書いた通信が悉く没収されたのは實に落膽の外ありません。手紙の如きも少し重要なものは皆不着です。私に來る郵便物は昨年始めから総て開封されます。聯合國が共同して行ふことですから如何とも致方ありません。併し此の如き状態は決して長く續くものではありません。先づ氣を長くして時節の到來を待つのです。日本の社會運動は決して非觀すべきではないと思ひます。吾々自身も覺らぬ内に勞動者の覺醒はメキ／＼と事實の上に顯はれて來ました。戦後が見ものです。八月廿九日 石川生

●布哇通信 宮本要君より

平民三部本日落手、難有う。布哇は面白い處です。櫻府の川崎氏、藤田氏もやつて來ました。ホルムルに新聞四、平均二千位、雜誌三つ、各島には新聞雜誌か八つ、眞に勞動者の味方を致すものは一もありません。

●名古屋、片桐市藏君より

拜啓昨年高嶽君に傳言した以來御無沙汰しました。小生等も去頃より鈴木君外二三名と普通選舉期成會を組織して今や各戸に付き請願連署を求めつてあります。何分貧乏團體ですから意の如く運動が出来ません。併し何うかして發展を計り度いと共に苦心をして居ます。(同君から政界大腐敗閣賊横暴の頗る痛快ある情報か來たか紙面の無い爲載する事出來ぬは遺憾である。)

THE HEIMIN

OCTOBER 1917,

No. 13,

THE HEIMIN is a sole organ of Japanese socialists in America, edited and published by S. Katayama. It is a monthly devoted to the interest of workers and socialists in America and Japan. We stand for the new International. Subscription price; one year 50 cents, single copy 5 cents.

DIPLOMATS' JAPAN AND THE WORKERS' REAL JAPAN.

Much has been written on Japan and the things Japanese during the past few weeks in dailies and magazines throughout America. This is entirely due to the presence of the Japanese War Mission. But we are here chiefly concerned with socialistic and labor problems. We quote only a few lines on the condition of Japan presented before the American public by Dr. Toyokichi Iyenaga, the paid press agent of the Japanese Government, which appeared in the New York Herald September 2, 1917:

"We are fighting to make the reign of democracy safe in the world and save it from becoming the slave of autocracy. Here I must be permitted to define democracy as I construe it to be. Democracy is no synonym for republic or a constitutional monarchy, democracy is enthroned in the country where social equality instead of feudal aristocracy prevails; where one's real merits count more than rank of family pedigree; where every individual has the right to the full enjoyment of "life, liberty and the pursuit of happiness" and is no slave of a dominant caste; where "right" rules over "might" and militarism is not the controlling force—in short, where justice, liberty, equality and humanity are made the basic principles of the State."

A pen prostitute can write anything convenient, just as a girl prostitute can say anything to her passing companion! Toyokichi's Japan exists only in diplomatic phrases to deceive the American public. A shadow of what the wise Dr. says does not exist in present Japan, especially under the present Terauchi Ministry. If there is a freedom for workers in Japan, it is only the freedom to be exploited and to starve.

The Workers' real Japan is not what Toyokichi describes so eloquently. Japan's dominant caste is that of bureaucrats and her controlling force is militarism. He says "we are fighting to make the reign of democracy safe in the world." But every attempt to emancipate workers is suppressed. There is no labor or socialist movement allowed, therefore there is no labor union in Japan. Every paper and every book on the socialist movement is suppressed. Books on liberal views are not allowed to be published or to be imported. Japan's autocracy is worse than that of Germany. The latter has universal suffrage, working people's insurance and labor unions, while Japan has none of these.

To support my views which are, of course, based on sound facts, I shall quote a few lines from an American writer:

"Japan's vast, autocratic, jingoistic imperialism, flushed with the economic conquest of China, and exploiting that limitless power for the benefit of its own marvelous system of aggressive and ambitious imperialism will constitute a danger to the world's liberal civilizations far greater—because far more extreme and harmful—than that of Germany is . . ." By Mr. G. L. Harding in the N. Y. Call on September 23, 1917.

The oft quoted phrase—Japan is the Prussia of the Far East—needs some qualifications, already mentioned, for the analogy is not complete by any means. It is true only as far as it goes in a military and autocratic sense.

Japan's bureaucrats followed eagerly Bismarck's iron and blood policy in the internal administration. Japan, indeed, adopted the worst parts of the German government, such as conscription, police rule and the three class system of election. So far they have succeeded with them. We want a change, we want a revolution!

EFFECT OF PRESENT WAR ON JAPAN.

Japan is getting rich on account of the European War. More than two thousand millionaires have sprung up on account of the war industries. Our capitalists are making enormous profits, as much as three hundred per cent. The gold reserves have increased more than three times since the beginning of the war, consequently prices of things have also very much increased. The index numbers of food stuffs increased from 125 to 168 in the past three years. But wages of labor, during the same period, increased from an average daily wage of \$0.366 to \$0.3785; only 3.4 per cent., and this in the city of Osaka, the very centre of industry. The income tax was increased 22 per cent. during the same period, which means increased incomes to the rich, while the workers get little over 3 per cent. more wages, but are compelled to pay 33 per cent. more for their food. Japan is not the place today "where every individual has the right to the full enjoyment of life, liberty and the pursuit of happiness," as Dr. Toyokichi says!

LABOR STRIKES IN INCREASE.

In spite of oppressive police rules our workers began to revolt against the brutal capitalists. They have no previous organization, but are organizing secretly in order to strike openly more and more. The Oriental Economist, Tokyo, gives increasing numbers of strikes since 1907. Last year 100 strikes with 8,413 strikers. This year, up to August 1, there were reported some 30 strikes with 21,136 strikers. The Economist says that there must be many more strikes not reported. It says that our government officers, especially capitalists, are shallow and bigoted in their views. Many of them still hold that the principle of old feudalism—masters and servants—is the best to govern the relations between labor and capital. To compel a patient subjection and unquestioned obedience is considered as the only way of safe living for the workers. The right of the worker is never recognized by them. The recent increase of strikes is caused by the high cost of living and the shameless exploitation of profiteers who have not the least consideration for the welfare of the workers. These conflicts once started will continue even after the war, and will increase in size and magnitude.

"Shinshakai" (New Society) has been edited by Comrade Sakoi with the aid of a few comrades; it will change its staff. Hereafter Comrade Arahata will assume the chief editorship with three other comrades, who will devote their time to the paper, namely: K. Yamazaki, M. Yoshikawa and M. Watanabe; the former editors, Sakai, Yamakawa and Tokobatake, will cooperate with them.

Comrade Arahata is a young Socialist, who has been active for many years and whose great passion is the emancipation of the working class. His convincing style of writing has always been an inspiration to the workers, while greatly feared by the capitalists. "Shinshakai" needs an energetic and able man like him. It requires a wise tact to beat the rigid censor and at the same time to educate, to agitate and to convince the workers. Comrade Arahata is just the man to meet this difficult task. We hope there is a great future in store for him.

HEIMIN BIYOIN (Proletarian Hospital).

This is the title given to the social work of Comrade Dr. T. Kato, whose social medical work has ever been growing in size and influence. He has on an average 1,750 patients, in four places, namely Tokyo, Yokohama, Nagoya and Osaka. Last year there were altogether 421,900 patients, although the places, except Tokyo, have been run only part of the year, namely, Yokohama started in September 1916, Osaka December 1916, and Nagoya July 1917. If the present rate is kept up they will amount to 628,750 patients a year. Comrade Kato has just started a great social institute with the Heimain Biyojin as a nucleus, a sort of the Maison du Peuple in Brussels. At present he is trying to raise \$500,000 to carry on the work on a business basis.

NOTICE TO THE READERS.

We are sorry to announce that we have to find a new office in New York, meanwhile all communications concerning The Heimain should be addressed to "S. Katayama, care of Mr. S. J. Rutgers, 30 Church Street, New York, N. Y."